

食の豊かさ 伊都国から糸島へ

く古代より豊かな食を生みだし続ける糸島の風土く

伊都国から繋がる豊かな風土

糸島市は福岡県の西部に位置し、『魏志倭人伝』に登場する「伊都国」があった地。日本最大の銅鏡「内行花文鏡（国宝）」をはじめ、数々の出土品が発掘されている歴史深いまちです。伊都国の名はその後「怡土（イト）」につながり、海側の地名である「志摩（シマ）」とともに郷土を表す音となります。

食材の宝庫と言われる成り立ち

脊振山系の山々から流れる清らかな水、広がる平野、玄界灘の海と穏やかな気

候と、先人たちの技術で、糸島の農畜水産物の歴史が育まれてきました。

古代の糸島人がいち早く稲作文化を取り入れ、稲作文化の原点でもある糸島は、日本列島の中でも最も長く米を食している地域と言い換えることができます。

また山々の養分が流れ出ている海では、様々な魚介類が取れる環境が広がっています。四千年前の糸島人はその海に糧を求め、豊かな食生活を送っていたことを、縄文時代の貝塚が教えてくれます。ハマグリやサザエ、タイやフグなどの食物の痕跡は、今と変わらぬ食材をすでに見出していたことを示します。

以降、現在に至るまで糸島人が農業、漁業を紡ぎ、より豊かな食材がとれる地域となっています。それは歴史と風土と糸島人が育んできた賜物なのです。

内行花文鏡（国宝）

太陽をモチーフにした銅鏡と言われており、女王が銅鏡を太陽に見立てて祭祀を行い、民衆を指導していたと考えられています。

伊都国王墓である平原遺跡は、米の収穫期に日向峠から昇る朝日の光が大柱に射し、そこから伸びた影が、ちょうど女王の墓の方向にさすように配置されていたと考えられています。

古代の糸島人が、年間を通じた太陽の動き「日暦」を中心に米づくり（農業）や生活を営んでいたことがうかがわれます。